

筑波大学日本文学会会報

第23号

1999年3月

雲のある日	(芳賀紀雄)	一
日本文学会だより			四
研究室だより			六
教官新刊紹介			十一
卒業生だより			十二
日本文学会教官学生名簿			十五

雲のある日

芳賀紀雄

——追憶がおおくなれば、つぎにはそれを忘却することができねばならぬだろう。そして、ふたたび想い出がかえるのを待つおおきな忍耐がいるのだ(リルケ『マルテの手記』)——

「戦後五十年」という記事が、報道紙上でさかんに取りあげられた平成七年の九月、ひとりの日本古代文学研究者が逝った。溯ること五十年前の同じ月、さだめの死の淵から、突如生きること命ぜられて還った人であった。もと海軍飛行予備学生、その人の名は吉井巖。享年七十三。

吉井さんとの最初の出会いは二十数年前だが、私にとっては運がなかった。学会での初めての研究発表をひとまず済ませて、緊張した一日も暮れようとするとき、混雑のなかから声を掛けてくれた人がいた。何を発表したのかとその人は尋ね、実は昼食後のこととて気持ちよく居眠りをしていたと弁解するのである。あきれ顔でこの愚直な人の胸の名札を盗み見ると、それが吉井さんだった。阿川弘之『雲の墓標』のあの吉野次郎少尉かと、その鋭い目を見つめ返して、別に大したことではありません、どうもすみません……それだけのことで終った。

出会いの不確かさのためばかりではないが、私は、吉井さんの主著『天皇の系譜と神話』の忠実な読者にはなれなかった。むしろ、『ヤマトタケル』の方を愛した。大学に戻った吉井さんが、当初、雲を取りあげる作品に執着し、ヤマトタケルの研究に情熱を傾けたのは、もとより海軍飛行予備学生であった経験と切り離せない。それにしても、『天皇の系譜と神話』に収められたヤマトタケル関係の論文をもとに、あらたに書きあげた『ヤマトタケル』は、その終章「ヤマトタケルの死」の「白鳥の飛翔」において異常な昂ぶりを見せるのである。人には、生涯一度しか書けない文章があるのかも知れない。武骨で固い文章が持ち味の吉井さんにとっては、『ヤマトタケル』の結びこそが、そうだったのではないか。

——白鳥は、すでに人の世を超えた、さわりのない空間に、永遠の時の流れとともに飛翔する存在であり、后たち御子たちは、人の世と定められた地上で、肉体の限界に悩み悲しむ存在であって、二つの世界は全く異なった次元の世界といえる。ただ、二つの世界が共時的に、重層して語られうるのは、后たち御子たちが、最後まで白鳥に向って歌いつづけるという、空しい激しい慕情の行為をやめないからであって、この心情によって、重層的構造の語りは、はじめて可能となっているように思われる。

だが、交錯しえない二つの世界は遂に切れる。この緊張した重層的構造の語りのあとで、ヤマトタケルの物語はその最後の場面を迎える。青い無限の深みの空に、今は、白鳥だけが飛んでいる。空はどんどん大きく広がり、白鳥は小さく小さく消えていく。

そして物語は終る。だが、物語が終ったあと、歌声の余韻のなかを、我々の一人一人の心のなかに、いつの間にか、その小さな白鳥が飛んでいることを見出すのだ——

最後に入院したその病室からは、夏空がよく見えた。見舞った折に、吉井さんが私に教え込もうとしたのは、空にかかる雲の名と形状についてであった。吉井さんは、傲りのない人だったが、ただ一度、酒を飲んだ勢いで、「雲」にかかわる用例を『新古今和歌集』あたりまでつぶさに調べていると自慢したことがある。だからそのとき、また雲かと、興味を示さない、厳密には興味のあることをさとりれまいとする態度で聞き流しながら、吉井さんの横顔を眺めていた。その目は穏やかで、雲の彼方になにかを捉えようとしているかのようだった。この人は、寝台から雲を眺めつつ、八尋の白智鳥と化したヤマトタケルを幻視したにちがいないと思えてならなかった。

昨夏、小学校の上級にさしかかる男の子の、その母の要請で、『日本大百科全書』なるものが、狭い居間をさらに狭くすべく陣取る

ことになった。大して読めるはずもない男の子が、嬉しげに最初にひらいたのは、「日本武尊（やまとたけるのみこと）」の項だったという。執筆者が吉井さんであることを、迂闊にも私は知らずにいた。つけても、なぜヤマトタケルなのか、父と子には、はやくも断絶のきざしがあり、正面から問うすべもない。ただ、男の子が吉井のおじいちゃんと呼ぶその人に、『ヤマトタケル』という本があること、その一冊は、父が頼んで、吉井さんの棺に入れてもらったこと、読める年齢になったら渡すということでは話は打ち切るほかなかった。

だが、この『ヤマトタケル』を、はたして渡してよいものかどうか。本を手にとつおいつつつ、ふと空を眺めるとき、見舞った折の吉井さんのまなざしが、なぜか自分に重なる。

——くものある日

くもは かなしい

くものない日

そらは さびしい（八木重吉「雲」）——

（平成十一年三月）